

語られない「朝鮮」—明治期の日本文学と「朝鮮」—

中央大学大学院文学研究科国文学専攻博士

2017年3月

ゆ うんきょん
劉 銀 晃

<本論のテキストと基本情報>

・染崎延房『朝鮮事情』(1874)

上 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/773796>、下 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/773797>

『朝鮮事情』は歴世、朝儀、道理の一（各道の官吏構成など）、道理の二（各道の距離や移動費用）、節序、服色、人物の七節に構成されている。歴史に関しては古代の三国の時代から朝鮮に至るまでの歴史を簡略に説明し、最後に朝鮮と周辺国の関係について述べている。

・榎本武揚ⁱⁱ『原名高麗史略 朝鮮事情』(1882) (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/766899>)

朝鮮に派遣されていたフランス宣教師たちから送られた報告などを集めて、フランス宣教師であるシャルル・ダレーが編纂したのが『朝鮮教会史』であり、花房義質ⁱⁱⁱからその情報を得た榎本はすぐに『朝鮮事情』の翻訳・編纂に入る。フランス語で書かれた『朝鮮教会史』の編纂者であるダレーは朝鮮へ行ったことがなく、1872年から2年にわたって主にダブリュイ司教（1845年入鮮、1866年京城で殉教）が調査募集した朝鮮殉教資料や、その他の朝鮮在住宣教師らの報告書簡などをまとめて作ったのが『朝鮮教会史』であった。その序論部分には朝鮮の政治や経済、風土などが200ページほど叙述されており、『朝鮮事情』はその部分を抜粋して訳したものである。実際、『朝鮮教会史』では朝鮮末期の後進性、政治的腐敗、社会的混乱、文化的貧困等を完膚なきまでに暴き、朝鮮に関する知識のなかった欧米に朝鮮のマイナス・イメージを植えつける決定的ものになったと言える。

・半井桃水『鶏林情話 春香伝』(1882) (初出『大阪朝日新聞』1882.6.25—7.23(全20回))

『胡砂吹く風』(単行本、1893) (初出『東京朝日新聞』1891.10.2—1892.4.8(全150回))

上 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/886355>、下 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/886356>

『続胡砂吹く風』(1895) (初出『東京朝日新聞』1895.1.17—4.25(全81回、未完))

・小杉未醒の『陣中詩篇』(単行本、1904) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876385>

・夏目漱石「満韓ところどころ」(1909) (初出『朝日新聞』1909.10.21—12.30)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1131548>、漱石全集. 第10巻、1937

漱石は1909年（明治42年）9月2日から10月14日まで満州・朝鮮を旅行した。その紀行文が「満韓ところどころ」である。

・高浜虚子『朝鮮』(単行本、1912) (初出『東京日日新聞』1911.6.19—11.25、『大阪毎日新聞』1911.6.19—8.27未完)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/766881>

<論文の構成>

序論—今、明治期日本の「朝鮮」を語る意味

第一部 明治前期—情報としての「朝鮮」

序章

第一章 明治前期の日朝関係の変化と朝鮮表象—情報としての「朝鮮」

第二章 明治前期の朝鮮関係書籍—染崎延房『朝鮮事情』、榎本武揚『原名高麗史略 朝鮮事情』

第二部 明治中期—具体化する「朝鮮」

序章

第一章 新聞紙面に表れる「朝鮮」

—半井桃水による韓国古典小説の翻訳『鶏林情話 春香伝』—

第二章 半井桃水の朝鮮小説『胡砂吹く風』の価値—初期小説の変化から—

第三章 日清戦争期の朝鮮表象の変化—半井桃水『続胡砂吹く風』を中心に—

第三部

序章

第一章 日露戦争の経験が生み出した「朝鮮」

—画家小杉未醒の『陣中詩篇』—

第三章 満洲・韓国旅行から書かれた未完の紀行文

—夏目漱石「満韓ところどころ」—

第四章 植民地朝鮮を描いた最初の小説—高浜虚子『朝鮮』—

結論 語られる「朝鮮」、語られない「朝鮮」

序論 今、明治期日本の「朝鮮」を語る意味

一 「韓国」と「朝鮮」の表象的差異—呼称の問題

西暦二〇一六年、現在を生きる人間なら殆どが、特定の国民として生き、自分がどの国の人間であるか認識しているだろう。母国というのがあまりにも当たり前なことで、いつからその国名で呼ばれたかなどについて考えたこともない人もいるかもしれない。しかし、母国を離れてみると、当たり前にも思えたことも当たり前でなくなる場合がある。たとえば「韓国」という国名を日本では朝鮮半島（韓国名：韓半島）^{iv}の南部を治めている国を表わす名称として使っている。韓国内でも南だけを「韓国」として認識する考え方はあるが、「北朝鮮」^vを「北韓」で、韓国を「南韓」で称する場合もあることを考えると、北朝鮮も含めて「韓国」と呼ぶのが韓国人の一般的な認識である。

このような認識は辞書にも表れている。「韓国」を「古朝鮮^{vi}以来韓半島を中心に韓民族が統治した国の通称」と説明している辞書^{vii}もあるが、「韓国」を歴史的には「大韓帝国（一八九七年に新しく定めて国号）の略称」で、地名としては「大韓民国の略称」と定義している辞書^{viii}もある。同辞書では「大韓民国」については「アジア大陸東側にある韓半島とその付属島嶼で成されている共和国」と定義している。二つの辞書とも「北朝鮮」を国として公式的には認めていないため、北朝鮮を韓国に含めている。韓国人の認識にある「韓国」という国名は「韓半島の南」を表わす場合も、「韓半島全体」を表わす場合も、歴史的に古い時代もすべて含めた意味で使う場合もあるなど様々である。

改めてこのような国名について述べたのは「韓国」や「韓国人」という言葉が論者にとっては簡単に言えるような言葉ではないからである。韓国内では北朝鮮を除いた認識で使われる場合でも、その逆に北朝鮮を含めた認識で使われる時でも「韓国」を「南朝鮮」と呼ばない限り問題にはならない。韓国で「北の方」を「北韓」と呼んでいるのと同じく、北朝鮮では「南の方」を「南朝鮮」と呼んでいるため、韓国人にとって「北朝鮮」や「南朝鮮」という言葉は禁忌の言葉のように思われているからである。しかし、論者のように国を離れている人間においては「北朝鮮」という言葉が禁忌ではなくなるのに反して、「韓国」という言葉も簡単に言える名称ではなくなるのである。

ここで日本の場合の使用例を考えてみると、日本人が認識する「韓国」という言葉の中に「北朝鮮」は含まれていないということは言うまでもない。辞書でもそのような認識は明確に表れている。『日本国語大辞典』（小学館、二〇〇二年）では「韓国」を「カンコク」ではなく「カラクニ」と発音していた古い時代の日本で呼ばれていた「韓国」について「古くわが国で朝鮮を呼んだ名」と説明している。その他の辞書でも

「カンコク」と発音する「韓国」についての説明では「東アジア、朝鮮半島の北緯三十八度（軍事境界線）以南を占める国。正式には大韓民国。また、李朝末の一八九七年から、日本に併合される一九一〇年まで存在した大韓帝国の略称でもある」^{ix}とほぼ同じ内容で定義されている^x。一方、「北朝鮮」については「一九四八年九月九日、金日成の主導により朝鮮半島北部に創建された社会主義国家」^{xi}と記されている辞書もある。これらの事実から分かるように、韓国では存在しない歴史的名称の「朝鮮」という言葉が日本には存在しているのである。

このように「北朝鮮」を表す言葉として残っている「朝鮮」という言葉^{xii}はただ言葉だけ残っているわけではない。現在の韓国人にとっては驚くべきことに、日本には「朝鮮」という国籍も存在している。韓国人にとって「朝鮮」という国はどこにも存在しないのに、日本には「朝鮮」国籍をもっている人々が存在している。韓国で「朝鮮」は一三九二年に建国され、一八九七年からは大韓帝国に改称された国で、一九一〇年日本に国権を奪われるまでを指す言葉で、現在の韓国では実在しない過去の国を表わす言葉である。つまり国の称号としては、日本の植民地支配下だった一九一〇年から一九四五年までの期間は「韓国」でも「朝鮮」でもないということになる。広い意味では「韓国」と言えるが、公式的な言い方はなかったと言ってもいいだろう。日本の植民地であったため日本の一部として認識されていたかもしれないが、日本国内でも植民地を本土と同じとしては扱っていなかった。日本人にとって植民地はいわゆる「外地」であり日本ではなかったたのである^{xiii}。

ここまで長々と「韓国」という名称について述べたのは、その言葉に日本の中の「韓国」や「韓国人表象」が隠れているからである。一方「朝鮮人」という言葉について考えてみると、「チョソニン」という韓国の発音で言った場合は差別的な意味などは含まれていない普通の「朝鮮の人」と認識される。しかし、日本語の発音で「チョウセンジン」と言った途端に差別語になる。同じ言葉でも発音によって表す意味が変わるのである。日本語が分らない現在の韓国人には「チョウセンジン」という言葉は日本植民地を思い出させる差別語で、元々それが「朝鮮人」という漢字の日本式の発音であるということなどはほとんど知られていない。少なくとも日本語を知らなかった時の論者は知らなかった。もちろん、朝鮮時代に日本人が朝鮮人に「チョウセンジン」と呼んだから差別語を使ったとは一概に言えないだろう。どんな時代にどの国の人がどんな言葉を使うかというのは、その言葉に対してその言葉を使う人の認識が窺える重要な、まさに「キーワード」になると考えるからである。差別語だと分っているのにその言葉を使う場合と、差別的意味をもたずに辞書的意味で使う場合、その言葉を発した人の認識は確実に違うと考えてもよいだろう。現在の韓国では「チョウセンジン」は差別語としてしか認識されず、いわば「イルゼンデ（日帝時代、日本植民地時代）」を描くドラマなどでなければ使われない。日本でも韓国人や北朝鮮の人、在日コリアンに対して反発の意味を含めてわざと「チョウセンジン」と言う人でなければほとんど使われていない。

しかし、歴史上の「朝鮮の人」を日本語で発音する時は「チョウセンジン」と発音するしか方法はない。そういう時も差別語を使ったとは言えないだろう。これは現代においてその言葉を使いながらもその「チョウセンジン」という言葉に残っている差別的意味が先立ってしまい、差別的に使っていないのにもかかわらず、いざ使うことになると心地がよくない思いをするのが実状である。「韓国」が独立した一つの国として樹立する前まではこの「チョウセンジン」という言葉を、本来の「朝鮮の人」という意味でも差別的意味でも使っただろう。それ以外に表現できる言葉がなかったからである。意識して「韓人」という言葉も使われるが、「チョウセンジン」と言いながら「朝鮮の人」という意味で使った人もいたはずである。

このように「韓国・韓国人」や「朝鮮・朝鮮人」という言葉からもそれを発する時の認識が窺われる。歴史上で「朝鮮」（一三九二～一九一〇）が「大韓帝国」（一八九七～一九一〇）^{xiv}という国号にかわり、日本の植民地になるまでの時期が明治期に当たる。言い換えると、明治期は「朝鮮」という国が存在した時代であり、「チョウセンジン」という言葉もまだ差別的な意味をもっていない時期である。また、韓国に対してマイナス・イメージが確立されていないこの明治期の朝鮮像を明らかにすることによってその後、朝鮮・韓国像が変わっていく様子がよりはっきり見えてくるはずである。

以下、「韓国」や「朝鮮」という言葉がもつ意味、またそれらが発せられた時の認識、「朝鮮人」「韓国人」に対する日本人の曖昧な感情等の諸相を、明治の前期・中期・後期に書かれた「朝鮮」関係のテキストを時系列順に取り上げることで論じたい。その中には、案内記をはじめ朝鮮古典の翻訳、新聞小説、日記、紀行文、長編小説など多様なジャンルのものが含まれ、一見、本研究の対象についてランダムな印象を与えるかもしれない。しかし、明治期の「朝鮮」はそのようにランダムな姿としてしか表象されなかったのである。日本人によって表象された「朝鮮」に光を当て、その姿を浮び上がらせ、問題点や文学作品としての可能性を探ることこそ、現在、韓国人として日本の大学院で学んでいる論者がここで行ないたいことにほかならない。

二 語られない「韓国」—近現代作家たちの対応

日本が韓国を植民地支配したのは一九一〇年から一九四五年までの三十五年間である。三十五年間も韓国は日本の一部であったが、その一部であったにもかかわらず韓国について語った日本の近代文学作品はほとんど思い浮かばない。一九〇九年に生まれ、七歳から七年間韓国で過ごした経験のある中島敦の「虎狩」（『光と風と夢』筑摩書房、一九四二年七月）など少数のものしか一般には知られていないのが現状である。たとえば、日本の敗戦によって植民地支配から韓国が解放されてから三十三年後の一九七八年六月、中上健次はかつて日本の植民地であった韓国を訪れる。そこには日本が韓国で起こしたあらゆる暴虐、たとえば「強制徴用」「韓国語の剥奪」「虐殺」などの痕跡はほとんど残っていなかったと言う。そこにあるのは「のどかな、人の気持ちを豊かにする韓国風の屋根の家々の光景」であった。その光景から中上はフツと思ったと言う。「日本人は一体、何をこの民族に対してやったのか。（中略）不勉強のせいなのかかもしれないが、日本人が韓国でやったことを書いた日本人の小説を読んだためしがない事に思い至った。戦後三十三年、文学は一体何をやってきたのだろう。私は思った、隣国に対する加害に作家らは口を閉ざしたままである」^{xv}と記している。

中上のこの言葉はおそらく作家や読者などだけに向けられたものではないだろう。より広い意味で、侵略を行なった政治家たちや、侵略の過去を知りながらも口を閉ざしているすべての日本人に向けた言葉ではないだろうか。日本が東アジアや南洋の諸国に対して帝国主義的な侵略行為を行なったことは事実であり、被害を受けた国々では日本から被害を受けたことを忘れることができないのである。一方、日本国内ではそのような侵略の過去を「負の歴史」と称するだけで、できる限り言及しないような動きも見える。戦争に負けて日本も被害者の立場になったからといって、日本から被害を受けた諸国が日本を「被害者」として認めるはずがない。だが、日本では植民地時代や自ら行なった侵略について、ほとんど語ろうとしない。このように加害に対して口を閉ざすということは、その加害の被害を受けた対象に対しても口を閉ざすことになるだけでなく、日本が犯した侵略行為に対してもその被害を受けた国や国民に対しても関心を向けないということになる。日本側のこのような無関心は、逆に被害を受けた諸国からは繰り返し批判される種になっている。被害を受けた諸国としては忘れられないことが、日本では忘れ去られているのである。

先の中上の言葉は戦後の日本人に向けて述べられたのだが、植民地支配下の時期も日本人は韓国についてほとんど語っていない。前述のように、韓国について語った作家があまり浮かばないということは、戦前という日本の植民地時代も、戦後と同じように作家たちは韓国について多くは語らなかったということだろう。それは韓国を植民地支配していることへの後ろめたさがあったからだろうか。だとしたら韓国を植民地化する前はどうかだったのか。日本が韓国を植民地支配する前は明治期に当たる。韓国が侵略の対象ではなく隣国であった明治期には韓国について活発に語られたのだろうか。実際のところ、明治期に書かれた文学作品のなかで韓国や韓国人が登場する数は少ない。その理由として考えられるのが、日本と韓国が隣国と言っても陸地で繋がっている国ではなく江戸期までは簡単に往来できる国ではなかったためであろう。現代において日本と韓国は近い国であるが、交通手段が現代ほどなかった明治期においては、はるかに遠い国であったかもしれない。

このような日本と韓国の関係が変わるのがその明治期である。最初に近代的な国交が結ばれるのが一八七六年の不平等条約である日朝修交条規^{xvi}である。それから約三十五年後の一九一〇年には韓国が日本の植民地になる日韓併合条約^{xvii}が結ばれる。日韓併合条約が結ばれる前までは「朝鮮」という国は存在しており、日本国内でも朝鮮という国が認識され、朝鮮についてある程度は語られたはずである。それにもかかわらず、実際には文学者の間で、語られた痕跡をあえて探せばならないほどに朝鮮について語られていない。本論で注目したいのが、「朝鮮」という国と接し始めていた明治期に朝鮮が語られていたのか、また語られていたならばどのように語られたのだろうかという問題である。これに関連して朝鮮表象について先駆的な業績を残したことで知られる朴春日は「文学における国際的な交流と連帯」について述べた後、次のような問題提起を行っていた。

考えられることは、翻訳活動の量的な、あるいは質的な発展をはかると同時に、ある一個の民族文学の内側にある国際的な側面をきりひろくこと一すなわち、その一個の民族文学が他の国家と民族をどのようにとらえ、どのように形象してきたか、を明らかにするという新しい問題が提起されるであろう。たとえば日本文学は、その総体からみれば日本の社会と人間を写しだす「鏡」であると同時に、近隣諸国の社会と人間をも映しうる「鏡」でもある、ということだ。もちろん「鏡」自体が歪んでいる場合もあり、またそれは変化していくが、それらをふくめて、ある一個の民族文学がとらえた外国の社会像や人間像を発掘し研究するといった問題である^{xviii}。

右の部分で朴春日が述べているように「一個の民族文学が他の国家と民族をどのようにとらえ、どのように形象してきたか」、すなわち「一個の民族文学がとらえた外国の社会像や人間像を発掘し研究」することが内から外へ、また外から内への理解を深める道であると思われる。本論文では、朴春日が同書の他の箇所述べている「帝国主義と新旧植民地主義に反対する」という立場での基本的な問題として重視している「翻訳活動」のもつ「国際的な側面」を、イデオロギーのみに囚われた観点ではない立場で重視する。そのため、明治期の「朝鮮」をめぐる行なわれた他言語から日本語に翻訳された案内記的な書籍などをはじめ、小説を中心にしながらも、小説だけでなく紀行文など種々のジャンルのテキストに登場する「朝鮮表象」を扱う。その際、研究対象としての「朝鮮表象」を朴春日の言うような「鏡」として「映しうる」という言い方ではなく、「語られる」「語られない」という表現を用いる。それは、「語り」というナラトロジーの方法を導入するという狭義の意味ではなく、このような比較的長い時系列のなかでジャンル横断的に研究を行なうには、やや幅の広い意味をもつ、人が生き、生活する模様が「語られる／語られない」という肯定と否定の両面から考察する方法が適していると考えからである。

<論文の要旨>

序論の「一」ではまず現在、明治日本の「朝鮮」を語る意味として「韓国」と「朝鮮」の表象的差異としての「呼称の問題」が扱われている。明治期の日本で「朝鮮」がどのように認識されていたかを検証する過程で、「朝鮮」と「韓国」という呼称の混在があり、そのような事態が問題を複雑化していることが明らかになったからである。

韓国で生まれ、韓国人として生きている現在の私たちにとって、韓国を母国と言うことはほぼ自明のことである。だが、自分の国を「韓国」と言いながらも、その「韓国」という呼称の来歴を考えたことがない人が多い。本論執筆の最初の第一歩は当然視されているこの「韓国」という単語の意味を探ることからはじまった。革命や王朝の変動などによって「朝鮮」から「韓国」へ移行したのであれば、「国号」は明確であり、当然、「呼称の混在」は存在しないはずである。この問題のルーツは、近代の日本が大きく関与している明治期にあり、そこに遡らなければ理解できないと言える。

序論の「二」では、以上のような問題意識から日本の近現代作家たちを例に考察し、東アジア諸国を植民地化し加害者の立場にあった日本は、敗戦によって被害者の立場に変わることによって過去の歴史を顧みる努力を失い、作家たちも加害者としての歴史に対して口を閉ざして語ろうとはしなかったことを糸口に、明治期の日本が「朝鮮」と「韓国」という呼称を混在していた時期であることに注目した。序論の「三」では上記の研究を行なう上での本研究の意義を述べた。

第一部「明治前期一情報としての「朝鮮」」では日朝関係の変化と朝鮮表象との関係を、日朝修好条規が結ばれた一八七六年前後を中心にして明らかにしている。第一章では、新聞や書籍など朝鮮に関する情報を得ることのできない明治前期においてより印象的に多くの人々に朝鮮で起きた事件を伝えるために「錦絵」が効果的に機能したこと、たとえそれが正確な朝鮮人の様子や風習を描いたものでなくても、近代化する日本が強調されればそれでよかったことを明確にした。「錦絵」で表象された朝鮮は、中国人のように描かれていてもそれが日本人でなければ通用され、印象的に描かれていたのである。

第二章では、情報として「朝鮮案内書」のような書籍である『朝鮮事情』類を扱った。代表的なものが、染崎延房の『朝鮮事情』（三書房、一八七四年）、榎本武揚の『朝鮮事情』（集成館、一八七六年）で、両者とも朝鮮の歴史や地理、政治、風習などを知識として記した書物であった。しかし、実際の朝鮮を経験したことのない人によって書かれた書物は、書き手の偏見や意図がストレートに入り、見てもいない国を自分の思うままに書いてしまう傾向があった。また、それを読む側の人も同じく書かれているものを信じてしまい、本に書かれたものが本物の朝鮮だと認識してしまう。これらの書物に記されている朝鮮の歴史や政治、地理、風習などは、知識や情報としての朝鮮であり、自分らと同じような人間が生きている空間として認識することは困難であった。これらの書物に書かれた朝鮮は表面的なもので、人々が動いている生きた空間としての立体感を感じられない。さらに情報としての朝鮮をより深く認識しようとする前に日清戦争が起きてしまうのである。

第二部「明治中期の具体化する「朝鮮」」では、日清戦争により朝鮮表象が変わっていく様相を検証した。第一章では桃水の経験から一八八二年『大阪朝日新聞』に連載された朝鮮の古典小説『春香伝』

の翻訳である『鶏林情話 春香伝』について考察した。知識ではなく物語の対象として、朝鮮がはじめて日本のメディアに登場するのがこの『鶏林情話 春香伝』を通してである。たとえば、朝鮮女性の節操について語る時、朝鮮では女性の節操が重要視されていたことを文書で説明するより、物語の主人公である成春香が男主人公である李道聆と婚約した後、彼から何年も連絡がないのに命をかけて節操を守ろうとした物語を読むと、そのような女性の振舞いは朝鮮の風習だったことが鮮明に理解できるのである。物語のなかで語られる朝鮮は、日本人と同じように考えて暮らす朝鮮人たちが住んでいる立体的な空間として認識されるのである。

第二章では、桃水が翻訳に留まらず朝鮮を背景にした創作小説『胡砂吹く風』（『東京朝日新聞』一八九一年十月二日～一八九二年四月八日）を、「続き物」から出発した新聞小説の特性を色濃くもつテクストとしての観点から分析した。日本人と朝鮮人の混血児である主人公林正元を通して、両国の関係を模索しようという桃水の志さえも窺える本作は、朝鮮を舞台に、朝鮮の風習や言葉などの文化について朝鮮人を登場させて小説化した明治期唯一の本格的な「朝鮮小説」とも言える。本作は新聞小説として毎日挿絵とともに連載され、読者の目に入ったということも特筆すべき部分である。その新聞を手にし、毎日その小説を文字で読み、挿絵を見て、読者は朝鮮で繰り広げられる『胡砂吹く風』があたかも日常と地続きのように感じられ、朝鮮がより身近になったと推察されるからである。その意味で新聞小説は、日々の慣習的な読書行為によって単行本よりも読者の日常性と隣接させ「朝鮮」という国を理解させる契機になったとも言えるだろう。

しかし、『胡砂吹く風』連載から四年後に起きた日清戦争によって、桃水は朝鮮を積極的に語ろうとしはしなくなる。『胡砂吹く風』から窺われる桃水の朝鮮は一面ではその小説中にもあるように確かに「汚くにおう国」ではあったが、決して日本より劣等な国ではなかった。だが、日清戦争で清国に日本が勝ったことは清国を含め、清国に束縛されていたと日本側からは思われていた朝鮮までも、日本より劣等な国のように見る視線を多くの日本人に与えてしまう。朝鮮は日本の保護を受けなければならない弱い国であり、他方、日本は朝鮮のために清国に勝ち、朝鮮を開放させる優越的な国であるという認識を生む。

第三章では日清戦争後の朝鮮の変化として、桃水の『続胡砂吹く風』を中心に取り上げた。日清戦争において日本では朝鮮について同格の国として語ろうとする動きは見えなくなってしまい、日清戦争直前に書かれた服部徹『小説東學黨』（岡島宝文館、一八九四年）では日本人による朝鮮での革命が描かれ、西洋とは違う新しい朝鮮を夢見ている「東学党」を利用し日本人が新しい朝鮮を作るという内容から、日本に干渉される朝鮮がイメージ化されていたことが分かる。一方、桃水は『続胡砂吹く風』（一八九五年一月十七日～四月二十五日）で日清戦争後の中国大陆での日本の立場を語ろうとしたが、途中で小説は中断してしまい、その後は朝鮮について語らなくなる。もはや実質的に日本の保護国になった朝鮮について、自分が経験した過去の朝鮮を重ねることができなかつたのである。

第三部では「明治後期一朝鮮体験と文学の具現化」として、日露戦争後の日本の文学者の目に映った「朝鮮」を対象にした。日清戦争の戦勝によって日本人が朝鮮に対して優越感をもつようになったからといって、すべての日本人が同じ考え方をしたわけではない。日清戦争時までは文学者たちは朝鮮について語ることはほとんどなかったが、朝鮮を直接的に経験し始め、朝鮮について語りはじめるのが日露戦争時からである。日露戦争には前の戦争より幅広い分野の日本人が戦争に参戦する。

第一章では、直接朝鮮に渡って言葉と画像の二つによって語った画家の小杉未醒を扱った。従軍画家として日露戦争に参戦した小杉の目に映った朝鮮は、普通の人々が生活している場所であった。小杉は所属している雑誌社には画像を送ってそれを『戦時画報』に載せていたが、それとは別に『陣中詩篇』（嵩山房、一九〇六年）という単行本を残した。そのなかに収録されている「朝鮮日記」は、京城から平壤まで軍隊について苦難の行路を進まなければならない状況のなかで出会う朝鮮の人たちや彼らの暮らしなどが、あたかも写生するような目で描かれている。日清戦争より日露戦争の戦地はより悲惨であり、多くの文学者たちがそれを経験したが、小杉は戦争の非人間的な部分と朝鮮の悲惨な状況を、画像と文字という二つの手段によって批判的に捉えることができた。

第二章では、満州・韓国旅行の体験から書かれた夏目漱石の未完の紀行文「満韓ところどころ」（『朝日新聞』一九〇九年十月二十一日～十二月三十日）を考察した。前章で述べたように同時代の画

家としてはかなり戦争に対する批判的な眼差しをもっていた小杉も、残念ながら日露戦争前後の二、三年の間しか朝鮮について語っていない。日露戦争後の朝鮮は徐々に日本に植民地化されていき、独立国としての利権などが日本に移され、大韓帝国はいても有名無実な存在になっていたのである。一九一〇年には朝鮮王朝による「大韓帝国」という国は日本の植民地になり、もはや「朝鮮」は国としてはどこにも存在しなくなってしまう。その一年前に韓国を訪れたのが夏目漱石である。友人で満鉄総裁に任じていた中村是公の誘いで満洲と韓国を旅した漱石はその経験を「満韓ところどころ」という紀行文に残す。だが、紀行文の一部として書かれるはずであった「韓」の部分は書かずに途中で終わらせてしまう。漱石が満韓旅行をしたちょうど一ヵ月後に伊藤博文が朝鮮の青年安重根に暗殺され、着々と進行していた朝鮮の植民地化に対しての朝鮮側の不満が明らかになる。漱石が足を踏み入れたそのハルビンで漱石を歓迎してくれた人々が同席したその場で、朝鮮の独立を叫ぶ青年に伊藤博文が暗殺される。

漱石はこの歴史的イベントに対して、大きな声を上げることはできなかった。さらに満洲について語ったようには、朝鮮について語ることはできなかった。だがこの紀行文やこの事件後に発表され、この事件について語り合う場面が登場する小説『門』（『東京朝日新聞』一九一〇年三月一日～六月十二日）などを通して、漱石がこのあまりにも強烈な歴史的事態に対して「語るができない」くらい強い衝撃を受けたということを本章では考察した。

第三章では、漱石が韓国を旅した一年後に日本に植民地化された韓国が語られる。いわゆる「日韓併合」の一年後を描いたのが、『朝鮮』と名づけられた高浜虚子の小説『朝鮮』（『東京日日新聞』一九一〇年六月～十一月二十五日）である。絵画の手法である写生を、文章においても活用しようとしたのが虚子であった。一年前までは外国であった地域が日本の一部の「外地」になり、そこに渡った日本人の一人として虚子は写生的な視線で一歩後ろからその朝鮮や朝鮮人を眺める。そのため朝鮮人の暮らしや日本と朝鮮との歴史的な事件などについて深く語ろうとしない。この一歩後ろからの距離が結局そこに生きている朝鮮人たちを見ることの邪魔になったのである。虚子が朝鮮人の目で朝鮮を語ることはそもそも不可能なことであるが、虚子の朝鮮に対する態度は距離を置きすぎている。

だが、植民地になった朝鮮について虚子はマイナス・イメージを語ったが、同時に日本人の姿についても批判的な視線で眺めている。一歩離れて距離を置いて見ることにより日本の悪い面も見ることができたのである。だがその結果、虚子は『朝鮮』で「朝鮮」は語らず、そのなかにいる「日本」について語ることになったのである。

ⁱ (そめぎき のぶふさ、1818-1886) 江戸時代末期から明治時代にかけての日本の戯作者・ジャーナリスト。幼名八郎、通称久兵衛。別号に為永春笑・狂仙亭・二世為永春水。生涯[編集]. 対馬藩士の子として江戸に生まれる。

ⁱⁱ (えのもと たけあき、1836-1908) 幕末・明治の幕臣・政治家・子爵。江戸生。通称は釜次郎、号は梁川。オランダに留学後、幕府の海軍副総裁となる。明治維新の時、五稜郭にたてこもり官軍に抵抗するが、のち許され、駐露公使としてロシアと樺太・千島交換条約を締結した。以後海軍卿・逓信相・外相等を歴任。明治41年(1908)歿、73才。戊辰戦争(ぼしんせんそう)において、旧幕臣として最後まで新政府に抵抗し戦った武人です

ⁱⁱⁱ (はなぶさ よしもと、1842-1917) 明治、大正期の外交官。岡山藩士で実業家、政治家(初代岡山市長)花房端連の長男。爵位は子爵。歴任した主な官公職は枢密顧問官、日本赤十字社社長など。欧米に外遊し、明治2年外国官御用掛となる。公使として朝鮮、ロシアとの外交につくす。のち農商務次官、宮内次官、枢密顧問官をへて大正元年日本赤十字社社長。大正6年7月9日死去。76歳。

^{iv} 地名など韓国と日本での名称が違う場合、本論が日本語で書かれ日本で発表される論文であることを考慮し日本での名称に従うが、韓国での名称を()で表記するか注で説明を加える。

^v 「北朝鮮」は日本での通称で、正式名称は「朝鮮民主主義人民共和国」である。

-
- vi 「古朝鮮」は韓国歴史上の最初の国であり、紀元前二三三三年から同一〇八年まで持続していたとされる。
- vii 『韓国民族文化大百科事典』（韓国精神文化研究院、一九九一年）。
- viii 『標準国語大辞典』（国立国語研究院、一九九九年）。
- ix 『日本大百科全書』第二版（小学館、一九九四年）。
- x 『大辞泉』第二版（小学館、二〇一二年）、『日本国語大辞典』第二版（小学館、二〇〇二年）でも同じ内容で定義されている。
- xi 注8に同じ。
- xii 日本では「北朝鮮」以外にも「朝鮮半島」「朝鮮戦争」（韓国名：六・二五戦争、韓国戦争）などにも「朝鮮」が残っていて、「韓国」という言葉と同じように「朝鮮」という言葉が一般的に使われている。そのため日本で近代韓国に関する研究をする研究者ならぶつかる問題がこの「朝鮮」という言葉である。金京媛は、「韓国文学の近代性を問い直す—李人植の『血の涙』と李光の『無情』を中心に」（『日本近代文学』第七十五集、二〇〇六年十一月）で、「「朝鮮」とは、前近代の李朝時代の国名であり、植民化されたため独立国家の建設ができなかったために残存し、植民地期に使われ、今は北韓の国名の一部になっている」とし「「朝鮮」は植民地化、近代国家の成立、分断を貫いている。それにその言葉の持つニュアンスには、韓国のレッドコンプレックスが染みこんでいる」と述べている。
- xiii 檜山幸夫「日本の台湾植民地支配と外地統治論」（『国民国家の構図』雄山閣、一九九九年十一月）。檜山によると立憲制国家として一八八九年に誕生した「大日本帝国」は、日清戦争を経て、「新たな国家体へと変質することになった」と述べ、「日本の固有の領土を内地とし、新たに領土として編入され憲法を適用せずに統治する地域を外地とする構造に変質」したと述べている。日本人にとって外地と称されるところが「朝鮮」や「満洲」などであり、日本の憲法が適用されない場所、日本の支配下にありながらも日本とは違う地域として認識されていたことが分かる。
- xiv 「大韓帝国」という国号は国名だけが変わり、朝鮮王朝がそのまま統治していたので朝鮮時代に含まれる。
- xv 中上健次「風景の向こうへ」（初出『東京新聞』一九七八年八月二二日～二五日、夕刊、底本『風景の向こうへ・物語の系譜』講談社、二〇〇四年一二月）。
- xvi 近代国際法に基づき締結された日本と韓国の間での初めての条約で、日本の一方的な領事裁判権を定め、朝鮮の関税自主権を認めないなど、不平等なものであった。江華島事件後に結ばれたことから「江華島条約」「江華条約」とも呼ばれるが、正式名称は「日朝修好条規」「朝日修好条規」である。韓国では「韓日修好条約」とも呼ばれる。
- xvii 韓国では「韓日併合条約」と呼ばれるが、「庚戌国恥条約」「日帝併呑条約」とも呼ばれる。
- xviii 朴春日『増補近代日本文学における朝鮮像』（初刊、未来社、一九六九年十一月、増補、同社、一九八五年八月）。本論では増補版を用いる。